

佐多稲子「キヤラメル工場から」論

——服装・時間・場所からの分析——

金原安里

はじめに

「キヤラメル工場から」は、一九二八年二月、『プロレタリア藝術』に窪川いね子¹の名で発表され、その二年後、一九三〇年四月、戦旗社刊行の『キヤラメル工場から』に収録された。

従来、本作品の研究は、佐多の洗練された文章を評価した佐々木基一の論²を軸に展開される一方、小田切秀雄や平野謙のように、当時『プロ芸』が求めていた「進軍ラッパ主義」的なものとは異なる点を指摘した論も多かった。九十年代に入ると新しい読みみとして、石川巧³や小林裕子⁴のような記号論的な分析も登場した。また、従来の研究は、作家論に傾いていた。本作品が、作者の実体験に基づいていることには変わりはないが、作者と作品を切り離して分析していく姿勢も必要であろう。ただし、本稿では、大正当時の風俗に照らして論を進めていくため、多くの箇所ではひろ子⁵を作者に置き換えて分析していく方法をとった。

作品に描かれた大正期は、職業婦人や「新しい女」、モダンガールなどが出現し、女性が注目された時代でもある。本作品に描かれている、女工をはじめ、工場主の奥さん、「身ぎれいな女」、女学生等、複数の女性たちは、服装や活動時間の違いによって、その階層の上下関係が明確に知られる。

本稿では、作品に描かれたひろ子の生活空間から、それぞれの階層の時間・服装・場所に焦点を当て、中流家庭からの没落を経験した佐多であったからこそ描けた、資本主義が生み出す弱者の存在の発見につなげていきたい。

第一節 馬に喰われる女工たち

大正四年十月、佐多一家は長崎から上京し、本所区向島小梅町に住み始めた。しかし、父の仕事は長くは続かず、一家の生活は瞬く間に困窮する。そのため、佐多は転校先の向島牛島尋常小学校を五年生途中でやめ、十二月より神田和泉橋のキヤラメル工場

「堀越嘉太郎商店」で働くこととなった。堀越商店は、化粧品を主な販売品としていたが、大正三年に森永ミルクキャラメルが東京大正博覧会で好評をえた後、それに刺激を受けた他会社が数々のキャラメルを発売し、堀越も大正四年に「ホーカーズキート」の販売を開始した。

「ホーカーズキート」は、麦と白砂糖に朝鮮人参、鶏卵、牛乳バターを配合し、定価は小箱七銭、大箱十四銭、子どもだけでなく、健康を気にする大人も含め、幅広い年齢層を対象とした商品であった。また、市村座・浅草公園キネマクラブの土産や、王子電車や京濱電車の景品にするなどの、派手な宣伝も行っている。

このような宣伝による効果、あるいは宣伝用の景品のため、キャラメルの生産量が増え、工場では人員不足に陥ったようだ。大正四年十一月二九日付の「東京朝日新聞」に「女工募集年齢十二三歳より廿歳迄」「至急申込まるべし」という女工募集を出している。おそらく、佐多の父親が見たのもこの朝刊であろう。

通常、製菓工場で女性が行う仕事は、菓子の包装、箱入れ、ラベル貼り、個数の計算などであり、特にキャラメルを一粒ずつ紙に包んでいく作業には、まだ成長しきっていない少女たちの、柔らかに小さな手が適していた。

これらは極寒の中の単純作業であり、工場側は女工達の熟練度を上げ、労働意欲を高めるため「出来高制」を導入した。ひろ子の工場では、日給制から「キャラメル一缶七銭」という賃金設定に変更され、ひろ子の日給は三分の一に下がった。ひろ子は年齢

を二歳偽って働いていることもあり、いつも二缶半しかできず、日給は十七〜十八銭である。実際、佐多の元々の日給は三十銭であったという。

なお、ひろ子の電車賃は往復八銭、おやつ焼き芋代が一銭かかる。工場に通うために九銭必要であり、残高は八銭程度である。これはキャラメル小箱一箱分程度であり、生活の足しにはならない。

ひろ子は学校では常に良い成績をとる優等生であり、友達からの羨望のまなざしや、大人に褒められることに喜びと誇りを感じていた。かつて、ひろ子の努力は確実に結果に結びついていた。しかし、工場ではそうはいかない。

出来高制の導入によって、収入が上がった女工がいたのは事実である。工場側が「本人の努力次第」と言ってしまうればそれまでだ。少女たちは不満を感じつつも「コマ鼠のようにもが」き、「それが自分の力の足りないせいやうに思」う。この制度は、低賃金や賃金削減を労働者に責任転嫁する。とりわけひろ子のような真面目な少女にとって、劣等者として名前を貼り出されることは屈辱であり、身心共に追いつめられたことだろう。

第二節 ひろ子の「東京地区」⁸⁾

佐多一家が移り住んだ本所区や、キャラメル工場のあった神田区の特徴について、山口義三は『東都新繁昌記』（大正七年六月、

京華堂)において、当時の東京各所を次のような言葉で表している。

お役所の麹町、書生の神田、和製の日本橋、高襟の京橋、南東京の芝、蟲声の麻布、華族の赤坂、腰弁の四谷、高台の牛込、学者の小石川、角帽の本郷、花の下谷、女の浅草、職工の本所、水郷の深川

麹町を『政治』日本橋を『商業』本所を『工業』浅草を『娯楽』という字で説明してゆくならば、神田は『学問』の字がふさはしい。麹町は『シルクハット』日本橋は『前垂』本所は『法被』浅草は『半襟』而して神田は『兵児帯』を以て象徴する。

(傍線は引用者、以下同。)

本所は、隅田川の景観の変貌を永井荷風が嘆いたように、明治後期から、最も多く工場が増設された場所である。ひろ子の父親のように、地方から職を求めて多くの人々が移住した。電車開通により、停留所付近は繁華であったが、一步裏道に入ると、職工や職人の住居や木賃宿が立ち並ぶ、下層社会が広がっていた。

一方、神田は学生の街である。明治大学、中央大学をはじめ多くの学校があるこの地区は、角帽姿の書生が古本屋で「参考書を売って文芸倶楽部を買ひ」、袴姿の女学生がさつそうと歩く場所

である。

ひろ子は、川に面した仕事室から毎日外を眺めている。外の看板はいつも輝いていて、はじめなひろ子とは対照的に幸せそうであった。恋しい学問の世界と、薄暗くて寒い部屋との間には、たった一枚の汚れたガラスがあるのみである。しかし、彼女にはそれを越えることはできない。だから一層、外部の世界は幻想的に感じられる。

マントをまとった少女は、いつも一生懸命涙をこらえて、走るように吾妻橋を渡った。その橋の向こうには、学生の街へとつながる停留所がある。しかし、そこへ出掛けていく目的は学業ではなく、過酷な労働である。

第三節 電車という空間

佐多が工場への通勤に使用した電車は、東京市営の路面電車である。大正四年当時の電車賃は、遠近に関わらず、片道五銭、往復九銭であり、学生及び労働者には、毎朝始発から七時まで二銭の割引が適応されていた。この割引適応時間を表す板札は車内にぶら下がっており、朝の七時を過ぎた瞬間、車掌が上に向けてしまう。山口義三『東都新繁昌記』は、「危険いゝもう乗れません、お後に願います」と車掌が声を濁らして叫んでも割引電車に乗らざれば巾着の中が危険いとても警告されたやうに猛然たる飛び乗り壇の浦の義経ものかは」と、必死で電車賃を節約しようと

する乗客たちの姿を伝えている。

そして、その同時刻、朝七時ちょうどにキャラメル工場の門は閉じられる。女工たちの日給は、その遅刻のぶんを差し引くのが面倒なほど僅かなものであり、数分の遅刻も許されなかった。ひろ子は「こゝえるよりも遅刻がおそろしかつた」とあるが、それは残忍な監督の懲罰を恐れてのことではなく、電車賃の無駄遣いであり、貧窮した家庭にとって大きな損失への恐れであった。

当時、通勤や観光には市電を使うのが主流であった。多くの人々が使用し、東京市内に縦横に通じていたからこそ、乗車時刻や停留所には階層ごとの特色が見受けられる。

向島小梅町に住んでいた佐多は、毎朝「吾妻橋」停留所から電車に乗り、「和泉橋」で降りた。早朝にも関わらず、電車にはすでに大勢の労働者が乗っており、その中には、まだ吊革に手が届かない少女のために、席をずらしてくれる人もいた。佐多の『年譜の行間』（佐多稲子、中央公論社、一九八三年十月）には次のように書かれている。

吾妻橋から和泉橋の方に行く電車に乗ると、山谷の向うから乗ってきた労働者がいっぱいいるわけですが、ちっちゃい女の子が乗ってるもんだから、声かけてくれるおじさんもない。

長谷川濤涯『東京の解剖―附都会安価生活―』（大正六年二月、

研文堂）では、浅草区の中で、田中町、浅草町、玉姫町、山谷町が細民屈として挙げられている。この地域は、南千住停留所から吾妻橋停留所間の沿線上にあり、おそらくひろ子に声をかけてくれたおじさんもこの地域に居住していたのだろう。ここは明治初年より車夫や職人が多く居住していた土地であり、山谷は日光街道が東京市街にはいる境に位置しているため、諸芸人、人夫、旅人などが宿泊する土地でもあった。

その後、明治二十年十月の「宿屋営業取締規則（警察令第一六号）」によって、浅草町が木賃宿の営業所に指定され、さらに明治三十年四月、貨物駅である隅田川駅が開設されてから、單身男子の肉体労働者が多く集まり、彼らの宿泊場所として木賃宿が定着した。さらに、前節引用の『東都新繁昌記』の、本所区を象徴する「法被」が、ひろ子と同じ時間帯の乗客のほとんどが着ている「印半纏」とほぼ同意義であることから、山谷から吾妻橋にかけて冬の早朝にできた薄暗い電車内の空間は、肉体労働者のものだとということができる。

しかし、数本後の電車には、もう別の階層のための空間が用意されている。労働者同士の寄り添うような雰囲気とは違い、「身ざれい」な男女が、どこかよそよそしい雰囲気を作りだしている。当時、電車を利用して外出する主婦は稀であり、朝に女性が電車を利用するのは、ほとんどが通勤、通学のためであった。よって、ひろ子が遅刻した日の電車内の「身ざれいな女」は、大正時代に著しく社会進出した「職業婦人」たちだと考えられる。

次に、彼女たちの勤務開始時刻及び服装をみていきたい。

当時の通勤職業婦人である小学女教師、百貨店の店員、銀行の事務員¹⁰、女子通信手、電話交換手、官庁の事務員（通信省の為替貯金掛、鉄道員の出札掛、鉄道員の調査掛）女子判任官、タイピスト、及び女学生の勤務実態は、終業時間は職種によりまちまちだが、始業時間は、夜勤などを除き、八時ないしは九時からである。

職業婦人たちの服装は、さらびやかとまではいかにないにしても、きつちりとした好感の持てるものである。彼女たち自身も、自らの服装に満足していたものが多く、制服に憧れて入社した者さえいた。さらに、この時代の女学生たちは、中流階級以上の娘がほとんどであり、彼女たちの服装の流行の移り変わりは激しく、話題の中心であった。奥様や令嬢の服装が豪華なのは言うまでもない。

ここで、ひろ子の勤務実態を確認しておきたい。まず、彼女の勤務開始時刻は朝七時である。終了時刻についての厳密な記述はないが、ひろ子が徒歩で帰宅した日、夕飯を食べる時刻は夜八時をまわっていたこと、工場から家までは徒歩で二時間かかること等から、帰路につくのは夕方六時頃だと考えられる。印刷局や専売局等の女工においても、朝七時から夕方四、五時までと同様であった。（ただし、深夜業をしていた紡績工場等の昼夜交替の場合は除く。）

女工の作業着は、その工場や製造物によって異なるが、ひろ子

の工場の制服は「白い上衣」と「前垂れ」であり、大正九年の森永の女工とほぼ同様のものであると思われる。わずかな工場を除いて、和服にたすきかエプロン、あるいは筒袖上着にモンペ、という飾り気のないものであった。

これらと比較すると、両者の違いは明確であろう。まず、女工以外の職業婦人の中に、朝七時以前に業務を開始するものはいない。また、終業時刻が早いわけでもない。ひろ子の工場に関して言えば、一刻の時間も無駄にしないため、早く菓子包装の仕事が終わった日には、化粧瓶洗いという別の仕事を用意されており、就業時刻が早まることはありえない。

つまり、七時以降に乗車する女性の中に「まくり上げたはだかの腕」を露わにした女性や、着物や袴の裾から「父親のお古の股引」をのぞかせている女性はいないと言うことができる。

「銀ブラ」という言葉が使われ始めたのは大正四年、ちょうど佐多一家が上京した年と重なる。この時期、各百貨店が流行商品売り出しているが、貧しい家庭の女性はそれらの商品を身に着けることはできない。彼女たちが紡いだ糸でこしらえたコートと、彼女たちが洗った瓶に詰められた化粧品で、美しく着飾った女性たちは、彼女たちと同じ電車に乗ることはない。

第四節 ひろ子のマント

服装、時間、場所、そして階層は密接に結びついており、本作

品には、この関係が顕著に表れていることは前述の通りである。しかし、唯一この関係を崩しているものがある。小林裕子氏が指摘する「有産階級のシンボル」としてのマントである。ひろ子が通動に着用していたマントは、以前から愛用していたものであり、女工頭の妹に「生意氣だ」と言っ、いじめられる元凶となつたものである。

中山千代氏の説に従えば、東京市民の洋装化は、関東大震災後に進む。しかし、明治四十二年に、子供の好きな服装を尋ねたところ、飛白の着物の次に洋服が挙がったこと、大正五年の七五三では、前年に比べ三倍以上も子供洋服の売り上げが伸びたことなどから、上流階級中心ではあるが、関東大震災以前にも、徐々に市民の洋装化は始まっていたことが伺える。

また、近代和装の特色の一つに、防寒の衣料が発達したことが挙げられる。男性では厚地の下着類やとんび等の外套類と帽子、女性では、吾妻コートとシヨール等であり、マントもこの例にもれず、明治初年に防寒着として取り入れられた。つまり、作品の舞台だと考えられる大正四年前後は、市民の洋装化が進む直前の過渡期に当る。よつて、和洋どちらの服にもはいることができたマントは、当時のニーズに応えたものであつた。

さらに、大正初期ごろ、マントは子供服として大流行することとなる。着脱や重ね着のしやすさや、成長が著しい子どもにもサイズの融通がきくという機能面に加え、帽子と合わせて着ることが多かつた子どもたちのマント姿は、まるで「赤ずきん」のよう

で愛くるしかつたためであろう。当時の新聞記事は、子供用マントの流行を物語っている。

▼目貫きの銀座街に秋の色を探ねるならば、夫れは十軒に一軒位の割合で裝飾窓を飾る子供衆の帽子やマントであらう
(中略)

▼マントは変化のしやうがないと見えて相変わらず強て新形を求めらるならば襟に刺繡のある位な処丈は長い程よく色合いは矢張り赤、紺、海老等に少し目先が變つたのが鶯葉色で、縞物ならばグツと思切つた奇抜な柄、まづ、此位な処であらう

(「東京朝日新聞」「頭巾とマント」(大正二年十一月六日))

ソフトの帽子かなんぞ目深く被つてもく／＼としたマントに身を包む見るからに暖かさうな、其子供マントの需要は四五年以來益増加して、かういふ物を売る店には大から小迄ズラリと店を飾つてゐるのを見受けるが、品柄は主に羅紗、モヘア、羊毛織なので、一番売れる所は羅紗一柄の好い縞ならば男児にも女兒にも向くといふので五圓からみの尺八寸即ち五歳内外の処である。女兒用としては此外無地羅紗の前に刺繡をしたり襟に飾りを加へたりしたものもある

(「東京朝日新聞」「防寒具(5)」(大正四年十一月二十八日))

なお、当時のマントの値段は、五円から二十円ほどだった。当時の下層市民の平均月収が、十五・七二円であることから考えても、マントは月収ほどのかなり高価なものであり、家計を助けるために女工として働いている少女たちとは無縁のものである。

また、佐多のマントは、ラシャで作られた赤いものであったことから、少女たちの間で最も人気の高かった形のマントをまっていたことが推測できる。その姿は、同じようにマントに身を包む裕福な家庭の子どもたちの中には溶け込むが、女工たちの中では浮いてしまう。しかも、そのマントが上等なものであればあるほど、その不適合さは増す。

ひろ子は、仕事では劣等者であるにも関わらず、誰よりも上等なマントを持っている。自分より劣った者が上等なものを持っているのだから、嫉妬心が芽生え、ひろ子が女工たちの反感を買うのは当然のことといえる。

しかし、ひろ子は女工にはそぐわないハイカラなマントをまとい続けた。かつての生活とひろ子を結びつける唯一のものであったこのマントに、再び学びの場へ戻ることへの夢を託したのである。しかし、一方で、ひろ子はすでに、早朝の電車の中の空間を自分のものだと感じている。つまり、マントをまとった彼女は、労働者階級と中流家庭との間をさまよう不安定な存在だといえることができる。

このように、ひろ子のマントは、彼女の心理状態を如実に示すものである。彼女は二か月ほどキャラメル工場で働いた後、今度

は小さなチャンそば屋に目見得に行くことになった。ここでの生活は、「キャラメル工場から」の続編である「目見得」(二人芸術)一九二八年九月)に詳しい。

「目見得」の末尾の文章には、次のように書かれている。

その店に居ては着られないので、持つて来た時から仕まひ込んであつたマントを、彼女はその店から出て出ようか、外へ出てから着ようかと迷つてゐた。

キャラメル工場に通つていた当時は、いじめられても、ひろ子は身分不相応なマントをまとい続けた。しかし、ここでは、店内の雰囲気や奉公人としての立場に気を配っている。それは、ひろ子が、「労働者」としての自分に慣れ、それを認め始めた証拠である。

だが、彼女は次の奉公先にも、マントは持つて行くだろう。「不平に似た自尊心」を持ち続ける限り、ひろ子がマントを手放すことはない。マントは、彼女の出自を示すものであり、いわば、その矜持であるからだ。

おわりに

以上みてきたように、本作品は、一人の少女の姿を追いながら、住居、電車、工場等、大正四年頃の東京の風景を映し出して

いる。一つの場所は、その時間帯によって大きく姿を変え、まるで上流階級あるいは下層市民専用のものが用意されているかのようになり、全く別の意味を持つ空間となる。そして、このことは両者にとつて暗黙の了解となつてゐる。不平や不満を持つていながら、「ここに身を置いていれば安心である」という矛盾した感覚は、早朝の電車の中にただよう労働者同士の温かい雰囲気や、トラホームの娘の「あら、怒られるわよ」と、ひろ子をたしなめる様子からも伺える。彼女たちは、周囲に合わせることによつて、自らを守つてゐる。

また、出来高制におけるキャラメル一缶の賃金は、店頭のキャラメル一箱分の値段と等しい。親からもらった七銭を握りしめ、心を躍らせて菓子屋へと走る少年がゐる一方で、家計を助けるその七銭を稼ぐため、休みなく指先を動かし続ける少女もゐる。

少女時代の佐多が、このような違和感を覚えることができたのは、かつては彼女自身もキャラメルを買う立場だったからである。

さらに、本作品は、複数の異なる階層の女性を描いた作品でもある。それは、大正時代を代表する、女学生、女工、職業婦人である。

女学生は「優良な子を出産するため」、女工は「大量の製品を生産するため」という目的の違いはあるが、双方には女性の体は機械化され、監視されているという共通点がある。さらに、職業婦人たちの活躍の裏には、男性より低い賃金で、同じ仕事を行わ

せることができるという、会社にとつて有利な背景が存在した。「プチブル」と呼ばれ、労働者階級から批難された資本家の女性でさえも、大きな権力によつて支配されていたといえよう。支配の層は何重にも重なつてゐるのである。

中野重治がつけたというこの「キャラメル工場から」という題名（付点執筆）と、児童労働、婦人労働、格差、山谷等の地域に内在する社会的差別は現在につながつており、本作品から見えてくることは無数にある。

注

- (1) ①初出（『プロレタリア藝術』（一九二八年二月）、②発収録単行本（『キャラメル工場から』（一九三〇年四月、戦旗社））、③『新日本名作叢書 キャラメル工場から』（一九四六年七月、新興出版社）④『佐多稲子作品集—キャラメル工場から』（一九五八年四月、筑摩書房）、⑤『佐多稲子全集 第一巻』（一九七七年十一月、講談社）の比較を行った。作品全体を通しては、大きな本文異同はない。⑤は、生前全集であり、作者も目は通したであろうが、底本に関しての記述はなく、また、①、⑤への異同の仕方も不規則である。よつて本稿では、初出「キャラメル工場から」を底本とする。

(2) 蘭切れのいい文章と清冽な感覚。勤労する人々の世界に自然に溶け込んでゆくならかな感情、自分への哀れさ

への滲み出る感傷、その感傷に歯止めをくわせる正確な眼と抑制のきいた文体、自らの可憐さに溺れることを絶対に許さぬ意地の強さと社会意識。(佐々木基一「解説」『日本文学全集39 佐多稲子集』一九六一年六月、新潮社)

(3) 小田切秀雄「佐多稲子入門」(『日本現代文学全集83 佐多稲子・壺井栄集』一九六四年五月、講談社)

(4) 平野謙「佐多稲子論」(一九六七年)(『現代日本文学大系79 本多秋吾・平野謙・荒正人・埴谷雄高・小田切秀雄集』一九七二年六月、筑摩書房)

(5) 石川巧「彼女の朝から別の朝へ—佐多稲子「キヤラメル工場から」論—」(『国語と国文学』一九九六年十月号)

(6) 小林裕子「マントという記号—「キヤラメル工場から」(小林裕子「佐多稲子—体験と時間」一九九七年五月、翰林書房)

(7) 「今日になっての話」『婦人画報』(昭和四二年十月)

(8) 作者の「私の東京地図」(一九四九年三月、新日本文学会)の題名より。

(9) 山口義三『東都新繁昌記』(大正七年六月、京華堂)より引用。

(10) 三越の女性店員、日本銀行の女性事務員のもの。

(11) 『時代が求めた「女性像」—大正・戦中・戦後にみる「女の一生」第十二巻』(佐瀬文哉「文化的婦人の職業」)

(二〇一一年二月、ゆまに書房)、高橋晴子『近代日本の身

装文化「身体と装い」の文化変容』(二〇〇五年十二月、三元社)、高橋晴子『年表 近代日本の身装文化』(二〇〇七年四月、三元社)を参照。

(12) 出典は注(6)に同じ。

(13) 市民に大幅な洋装が普及しはじめたのは、大正十二年に起こった関東大震災以降である。この大災害に遭遇して、和服の非活動性が問題になった。看護婦、女教員のような洋服着用者は助かり、和服の女性は、火焔から逃げ切れなかった状況が処々に起こった。災害時に生死を分けた服装の生々しい体験から、洋装化が唱えられたのである。

(中山千代『日本婦人洋装史』昭和六十二年三月、吉川弘文館)

(14) 「子供の話」『東京朝日新聞』(一九〇九年十二月二七日)

(15) 姉さんはいいいのですが、その妹がね、姉さんをかさにきて、あたしをいじめるの、おかしいわね。例えば、あたしがね、寒いときでしたから前から持っていたラシヤのマントを着ていたら、生意気だというわけ。女工のくせにマントなんか着てつて。(傍線は引用者)(佐多稲子『年譜の行間』一九八三年十月、中央公論社)

(16) 「キヤラメル工場から」以下八篇の短篇は、父の失業のために小学校も途中でやめて赤いマントを着ながらキヤラメル工場通いをするようになった少女の生活からはじまっ

て(傍線は引用者)(宮本百合子「婦人と文学(初出稿)」
『宮本百合子全集第十四巻』二〇〇一年十月、日本出版社)
(さんばら・あんり 二〇一一年度本学卒業生)